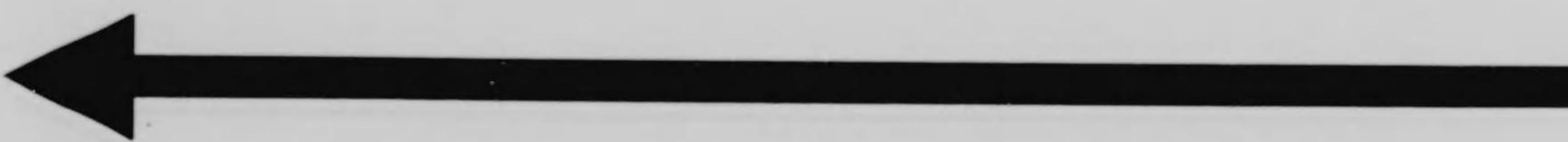


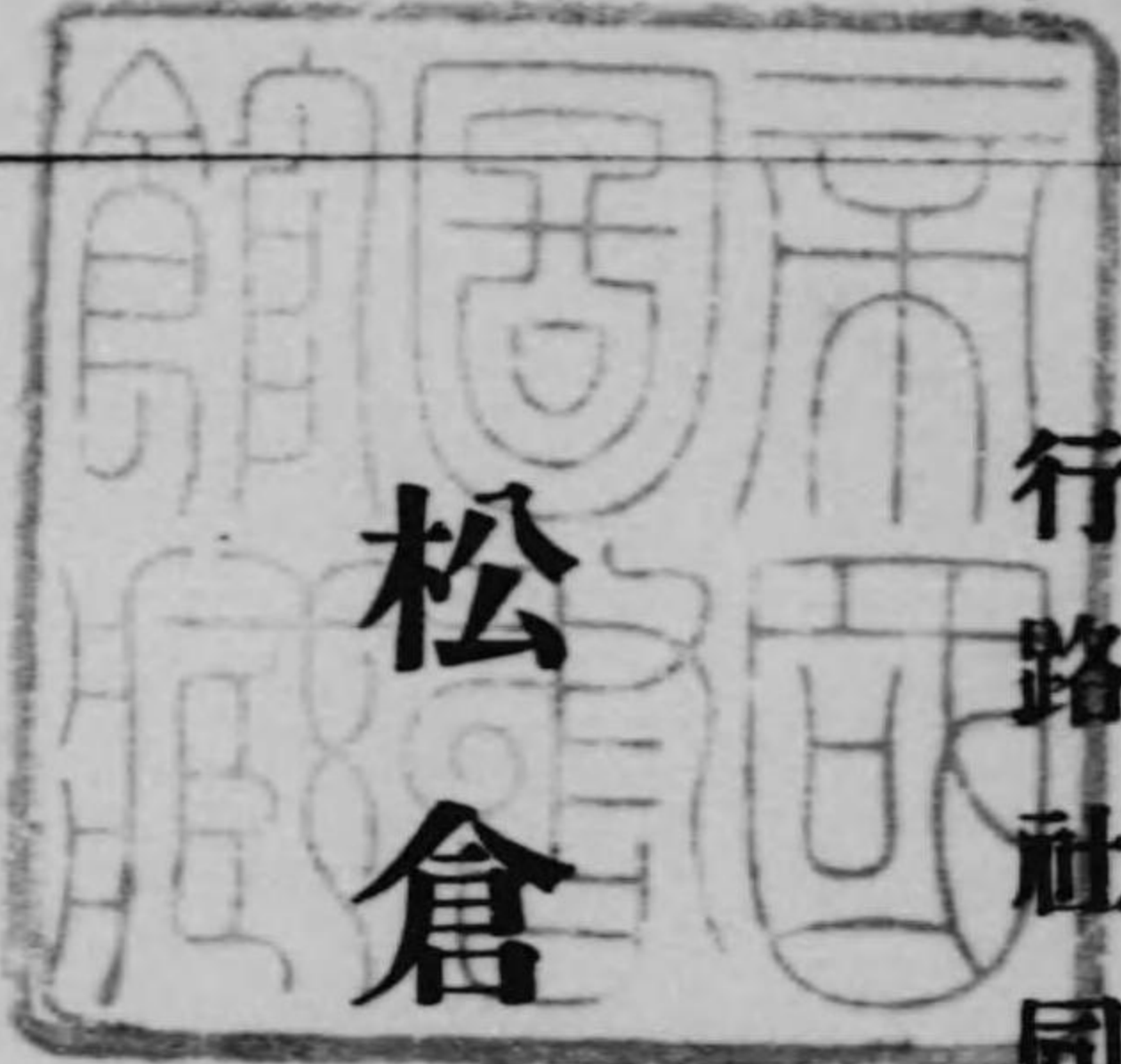
357
12
139



始



357-139



松倉米吉歌集

行路社同人編

アララギ叢書第十二編

東京古今書院發行

大正
12.3.31
内交



序

松倉君の歌集の序文を書かねばならぬと思ひながら
つひ筆をとらずにゐるうち、自分は、突然父の死に遭
うて、家郷に歸つて來た。

昨日初七日の法要をいとなみ、今日は家の上の茶畑
で、母や叔母や妹たちと茶を摘んだ。自分の長女も、
珍らしがつて摘んでゐる。さうして、しきりとみんな
に話しかけてゐる。茶はもう十日餘りも時過ぎて、葉

見渡せば西も東もかすむたも花のかけらす
手は春を来し、

九作

が大きくのびてしまつた。それでも全く摘まずにおくのも惜しいといふので摘みはじめたのである。弟は裏庭で薪を割つてゐる。弟はこのあひだから、ひまがある。薪を割つてゐる。

五月の空は碧く晴れて、鮮かな日光は、幾年ぶりかでこゝに相集つて居るわが肉親を照らしてゐる。家をめぐる樹々の若葉、見わたす村の山々の新緑は、一ぱいに光を湛へて柔かに深く輝いてゐる。が、しかし、今一二日すれば、自分も自分の長女もこゝを去つて行

く。弟も軍隊に歸つて行く。叔母もその家に歸つて行く。かねばならない。あとに残つて家を守るものは、母と妹と二人きりになる。自分の眼にはおのづから涙のたまるを覺える。この時、自分はまた松倉君のことを憶ひ出さずには居られなかつた。

松倉君は五歳の時その父に死なれた。それと同時に松倉君の家は破産した。松倉君は漸く尋常小學を卒へるとすぐに東京へ出た。彼の母はその數年前に、彼を

親戚の家に預けておいて出京してゐたのである。出京後の彼は鍍金工場に通つたり、金屬挽物職をしたり、働きどほしに働かねばならなかつた。書を読むことの好きな彼は、わづかに求め得た書を、夜爲事を終へて歸つて來てから一所懸命に讀んだ。さうして彼は遂に歌の道に這入つて行つた。

松倉君が初めて自分の處へ來たのは、自分の師伊藤左千夫先生が、亡くなつて、數月後の、大正二年十月で、彼が十九歳の秋であつた。彼はその以前、土岐哀

果君たちの主張に由つて、生活と藝術との交渉といふことを考へるやうになり、本氣に歌を作る氣になつたらしい。

松倉君の歌は、かなり長いあひだ、不透明な点や、蕪雜なところがあつたが、軽く浮ついたところや、いかげんにすまして居るやうのところはなかつた。

彼は常にもづからの實生活を核心にして、着實に專念に表現した。もづからの感じを適切に表現し切れな

いもごかしさを感じながら、忍耐し勉強して行つた。

6
彼はこれを表現する言葉の習練にも、非常に努力したが、言葉で感情を弄んだり飾つたりするやうなことはなかつた。彼はみづからの心を、その苦しい境遇のため、若しくは、賑やかな外界の影響に、わづらはされることなく、あくまでも謙抑な心を持ち続けつゝ、ひたすらに唯一つの道を見つめて歩いて行つた。眞直な一すぢの道を押し進んで行くのは苦しい。誰でもが進み得るやさしいことではない。彼の誠實と忍耐と熱心とが、この道を向上せしめたのである。彼は本當に

7
歌にいのちを打ち込んでゐた。生來不遇の境涯に在りながら、不治の病を身に抱きながら、反抗や皮肉の歌の殆どないのも、彼の性格と信念とをうかがふに足りると思ふ。彼の歌の一首々々はその生活の奥所から痛々しく沁み出て来る人間性の結晶である。彼の誠實、彼の作歌は、年を追ふに従つて、だんだんと光を現はして來てゐる。ますます深く根底の方へと這入つてゐる。しかるに彼はわづかに二十五歳を以て死んでしまつた。

松倉君の病は彼が二十一二の時分から、彼の肉體に喰ひ入つてゐた。咯血したことも一二度ではなかつたらしい。けれども、彼は病軀を押して爲事をせねばならなかつた。静養するなごといふことは境遇が許さなかつた。彼の歌は、いたましかつた彼の境涯が、病んでゐた彼の肉體が、短かかつた彼の生命が、直接に衝動的に發した吐息であり叫びである。彼の生涯に、歌といふ一すぢの路があつたといふことは、彼のせめてもの幸福でなければならなかつた。いのちの光をそこ

に認めつつ息づくことの出來た歌を彼は持つてゐた。

かうした深い人間性に根ざしてゐる松倉君の歌が、行路社同人の熱心な盡力で、歌集となつて、世に公にされるといふことを、自分は心から喜ばずには居られない。

松倉君は自分の安逸な感情の満足を外に求めようとはしなかつた。たゞ彼が死ぬ半年ばかり前に、戀人のことで苦しんだ時、田舎へ行きたい、田舎に何か出来る爲事がないかしらといつて、自分に訴へに來たこと

があつた。それから最後の病床にありながら田舎へ轉地したいといふことをいくどもいつた。二度とも彼ののぞみを満たすことは出来なかつた。松倉君が今まで生きてゐてくれたら、自分の郷家に来てゐて貰ふと、お互に大へん都合がよいのと思はるるのである。

茶畑のすみに、亡父がこの春接木した柿の若芽を見つけて、そのまはりの草を抜いてゐると、庭の牛がつづげざまに鳴く。見ると弟が仔牛をひいて山の方へ出

かけたのである。仔牛は弟の前にたつてゐせいよく走つて行く。親牛は自分の側を離れていつた仔牛を呼んでしきりに鳴いてゐるのである。

大正九年五月十九日、郷里安房吉尾にて

古 泉 千 橙

松倉米吉略年譜

明治二十八年

一 歳

十二月二十五日、越後國西頸城郡糸魚川町に生る。松倉
要吉の二男。母はつき子。父要吉は町屈指の水車業。

明治三十二年

五 歳

八月四日、父要吉赤痢にて歿す。

明治三十三年

六 歳

父生前に於ける思はぬ負債の爲め家産やうやく傾く。

明治三十五年

八歳

四月、糸魚川尋常小學校入學。

明治三十七年

十歳

四月十六日、兄清次郎親族會議の上上京。以後暫く所在不明。此時より一生を通じて兄弟の温情を缺きしもの如し。

明治三十八年

十一歳

四月、糸魚川尋常小學校卒業。後、親戚なる糸魚川町大瀨某に預けらる。父要吉歿後、家計やうやく困難なる爲め、母つぎ子は遂

ひに家財全部を賣却の上、横濱なる親戚某の許に至る。後上京して日毛某に再嫁す。

明治三十九年

十二歳

四月、高等小學校へ入學。大瀨某の許より通學す。

明治四十年

十三歳

三月三十一日、高等小學校を退學す。後、母を追ひて上京。本所區北二葉町日毛某宅に寄寓す。日毛某は當時東京毎日電報社社員たり。母つぎ子は裁縫を教授す。此頃一月餘リメリヤス業へ奉公に行く。

明治四十一年

十四歳

二月、本所區南二葉町金屬鍍金マルエム工場へ通勤す。
成績優異にて屢賞與を受く。

明治四十四年

十七歳

三月、同工場内に於いて戸塚恒司、前橋喜久男と相識る。
六月、小間物行商人たらむ事を志望し、たまたま恒司、
喜久男等の意見をうかふ。當時恒司に、文學趣味涵養
をすすめらる。七月、恒司、喜久男、と共に廻覽雜誌「青
年文壇」を發刊す。それより毎月に及ぶ。これそもそも
「行路詩社」の前身たりき。

明治四十五年大正元年

十八歳

四月、廻覽雜誌「青年文壇」を「茫星」と改稱。會員七八
名、文藝及び短歌を載す。喜久男、恒司、と共に短歌、
俳句、長詩、短文などを雜誌に投書す。

大正二年

十九歳

五月、早川幾忠「茫星」に加はる。六月、「茫星」を「カ
ハタレ」と改稱主として短歌を載す。原稿の取まごめは
幾忠が爲し後恒司に移る。十月、喜久男と共に「アララ
ギ」へ入會、古泉千樞氏の門に入る。

大正三年

二十歳

九月、喜久男肺病にて郷里越中へ歸省す。以來音信なし。

大正四年

二十一歳

三月、廻覽雜誌「カハタレ」を「蹟」と改稱し、印刷に附す。發行所を米吉宅に印刷所を幾忠（この頃より難彦の名を用う）宅に置き、活字、洋紙など買ひ來たりて、幾忠、恒司、と共に自から印刷職工たり。四月相坂一郎、高田浪吉「蹟」に加はる。八月、「蹟」を「行路」と改稱。十一月、印刷費不充分的爲め廢刊す。

大正五年

二十二歳

五月、肺炎を病む。爲めにマルエム工場を休みて床に就く。七月徴兵検査を受く。不合格。吐血數度に及びしが

十月頃より病やうやく退く。十一月、再び廻覽雜誌「行路の研究」を高田、相坂、戸塚、早川等と共に發行。相坂精二加はる。

大正六年

二十三歳

二月、廻覽雜誌「行路の研究」を「萬葉研究」と改稱し萬葉集の歌を研究す。四月、恒司、浪吉、一郎、米吉、幾忠ら五名の歌を集め「無名歌抄」として印刷發行す。五月、築地西洋洗濯業某へ奉公す。七月、之を止めて幾忠宅に寄食し、後、幾忠の兄の世話にて金屬挽物職木村某に奉公す。この頃より母つぎ子病みて床に臥す。十二月十六

日母つぎ子遂ひに歿す。以來木村某を辭し、挽物職人となりて同業竹内某へ通勤す。

大正七年

二十四歳

二月、家を出で、本所區長岡町東郷理髮店の二階へ寄居。竹内某へ通勤す。廣野三郎、中村美穂「行路詩社」へ加はる。

大正八年

二十五歳

二月、この月廣瀬照太郎行路詩社に加はる。竹内某より林某へ轉す。養子分となりて働く。四月頃より愛人を得。五月林某より去る。八月、田邊駿一氏の紹介にて同業時

園某へ轉じ同家に寄居す。物質上の基礎を愛人と共に作りむことを企圖す。九月十日咯血。十一日山本信一氏の診察を受く。肺病と確定さる。其夜より再び東郷理髮店二階に臥床、病中物質上のことは専ら涙吉らによつて支へらる。十月一日築地東京市施療病院へ入院すべく願書を出し診察を受く。此暫く後本所濟世會へ通ふ。十一月十二日施療病院へ入院。熱三十九度を下らず。十一月廿五日午後二時半死去。廿六日朝屍室にて告別の上入棺、砂村火葬場にて荼毘に附し、二十七日、本所長岡町東郷理髮店二階にて通夜。二十八日淺草北清島町報恩寺内西光寺に葬る。戒名「釋證誠信士」

松倉米吉歌集目次

大正八年

1

簷雨(八首).....	一
病みて(三十六首).....	四
冬ぐもり(二首).....	一六
油蟬(十八首).....	一七
親なし兒(二首).....	三
朝床(八首).....	二四

わかれ(七首)……………三七

雨ぐもり(一首)……………二九

ひまり(十七首)……………三〇

・ 兼(八首)……………三六

冬の街(八首)……………三九

一月(五首)……………四二

郊外(二首)……………四四

薬賣(一首)……………四四

大正七年

冬の日(十二首)……………四五

静けき夜(二首)……………四九

春の街(十七首)……………五〇

母は死にたまふ(十七首)……………五二

悔い(一首)……………六一

秋の夜(三首)……………六三

大正六年

秋たつ頃(四首)……………六三

夕空(一首)……………六四

場末(五首)……………六五

まひる(十首)……………六七

夜仕事(五首)……………七二
 夕暮(十七首)……………七三
 朝(七首)……………七九
 ある夜(一首)……………八〇
 冬の街(九首)……………八二
 父(二首)……………八五
 凍雪(四首)……………八六
 兄の結婚を祝す(一首)……………八七
 山茶花(五首)……………八八
 一郎を鎌山へ送る(三首)……………九〇

大正五年

秋晴(五首)……………九二
 砂塵(十首)……………追補
 赤(一首)……………追補
 夕飯(三首)……………九三
 夏のころ(二首)……………九四
 病中吟(五首)……………九五
 雑詠(九首)……………九七
 飴賣(二首)……………一〇〇
 夜の雨(六首)……………一〇一

長家から…其一…(一首)……………101
 朝飯(四首)……………104
 長家から…其二…(一首)……………105
 日だまり(六首)……………106
 長家から…其三…(二首)……………108

大正四年

嵐のあと(六首)……………109
 米吉の書簡(一篇)……………111
 夜(四首)……………113
 舞子(四首)……………115

朝顔(六首)……………116
 米吉の書簡(一篇)……………118
 青芝(八首)……………120
 貧窮餘録(六首)……………123
 米吉の書簡(一篇)……………125

大正三年

乏しき仕事(七首)……………127
 林登美子氏へ(四首)……………129
 眞餘粉(六首)……………131
 深案(二首)……………133

髓の柄(七首)……………一四
 機械の音(五首)……………一七
 一年(五首)……………二九
 歌會の歌(十首)……………四一
 米吉の書簡(一篇)……………四四
 追補

病む母……………一五
 砂塵……………一六



大正八年

簷
雨

この日ごろ窓ひらかねば光欲しほそくながる
る夕日のよわさ

病みて居て晝も夜もなき床にゐつ北風つよく
戸の破れを吹く

窓の戸をひらかで幾日すぎにけんすき間吹く
風今朝いと寒き

救世軍の集りの唱歌も今宵寂しひそくと降
る秋雨の音

一つ打ちては休みゐつつかれがれの唾^{つばき}手にひ
り槌打つ父はも

ひそくと戸の面には雨降るけはひ妻は乳ふ
さよもぬらすまじ

浪吉は吾の體を警察にすがらんと行きぬなせ
に自ら命を絶ちえぬ

膝も腹もひつしとかため寝卷の裾にまくるま
りつゝ悪寒を忍ぶ (十一月作)

病みて

ゆくゆくの思ひは暗しわく涙くひしむれども
流れて出づる

すゞかけの廣葉ひろはの雨にぬるる見て居る
眼になみだながるる電車にて

これの身のやまひあかすをまごひてか煙草の
火見つゝいましゝ君はも 山本氏の診察を受く

久々を宿にもごれば落かべや埃ほこりにあれて足ふ
みかぬる

両方の窓を開けば雨げふき部屋のしとりはい
やましにけり

6
久々に吾の寢床をのべにけりところくにか
びの生へたる

かび臭き夜具にながくこやりけりこのまゝ
にしていつの日癒えん

灯をともすマツチたづねていやせかるる口に
血しほは満ちてせかるる

血を略きてのちのさびしさ外の面にはしとし
ととして雨の音すも

宿の者醒めはせずかと秘むれども喉にせき來
る血しほのつらなり

菓子入にと求めて置きし瀬戸の壺になかばば
かりまで吾が血たまれる

かなしもよともに死なめと言ひてよる妹にか
そかに白粉にほふ

命かざるやまひをもちてさびしもよ妹にかそ
かに添寝をしつつ

歸しなば又逢ふことのやすくあらし紅き夜空
を見つゝ時ふる

嵐の中の人のさけびに目醒めけり夜ごとに血
を咯く時刻ときの來れる

かうかうと真夜を吹きぬく嵐の中血を咯くさ
ざしに心は苦しむ

嵐なきて明け近からし廣き街一面におこる蟲
のなき聲

所々に鳴る祭の太鼓とうくとこやりて居れる腹にひゞくも

入りみだれもみあふ神輿のゆゝしさを二階の窓にもたれて眺むる

すこやけき人のさわぎはともしかも神輿みこしひしめき動きて行ける

すこやけき人は大路にみちにけり祭のにぎはひ見てゐるさびしさ

秋げ寒き雨せうくと窓にふり神輿のどよみ遠のき行ける

彼岸に入りて二日目の今朝のひえくと冷たき風の蚊帳にはらめる

ふたたびは暑さにかへらぬ風らしもうすき布
團に身をおしつつむ

待ちてゐる思ひはすべな街すぢの活動寫眞館
に灯はともりけり

雨ごとに秋ふかむらししとしと窓ふりどざ
す雨のけながさ

棟裏の煤北風にいやゆらぐいよ／＼秋もさだ
まりにしか

窓とざしひとりにつらき夜となりぬ枕にちか
き秋雨の音

じつとりと盗汗ぬせにぬれてさめにけり曇りひと
日ははや暮れかゝる

待ちつかれ眠りたりしがうらさびし今まで來
ねばなごか今日來ん

曇り日は暮るるにはやし棟裏の煤のゆらぎも
見えなくなれる

秋のけのふかまるにつれ一日々々吾のからだ
のおそろふらしも

かけ布團に羽織かけそへくるまりて今朝の寒
さのすぐるを待つも

窓の戸の少しのひまゆ吹く風は布團とほして
しのぶにつらき

今朝も雨に窓はひらけず衰への日毎にしるき
わがからだかも

朝飯を今朝は思ふさへ頭重しかくはなりへ、
病ひ重るか(九月作)

冬ぐもり

はるくゝに水田白けて冬ぐもる空のいづこか
鳴きごもる牛

ごろ水のぬくもり見えて冬ぐもりここの水鳥
鳴かむともせず(大正四年二月作)

油 蟬

如何なる仕事ださるゝも知れずろくの調子
見てゐるうちにはや汗ながるる

この家に来て初の花よりは妹より來し晝の休
みにゆるりと讀まな

爲事や、手には馴れたりまんま晝街のどこに
か油蟬なく

親方が見にあたる聲のあらあらし爲事の出来
のはえぬ切なさ

妹がちかひかたかりし故それは案せずゆめ爲
事には心ゆるさじ

雨氣ふかき今朝の寒さにめざめけり肌さぶし
もよ久しく逢はねば

便りたえてあまりに久し柿の青葉にそよ渡る
風の今朝いたく寒き

どりこしのねたみにあらん昨日より續くあは
れのやりどころなさ

このまゝに便りはたゆともゆめ妹はあきらめ
がたき心なりけり

やるせなくろくろ場には立て爲事着の汗づき
て匂ふ今朝はすばゆき

ひがみ心さびしくなりて仰ぎみれば桐の垂實
のうるほひのなさ

満たぬ思ひに別れて來にけりひつそりと祭の
夜も更けわたりたる

軒提灯のあらまし消ねてならびたる夏の祭の
をはりのひそけさ

うらみ言いひて別れて來たりけり辻の神樂も
はてゝしまへる

起き残る家あるけはひむし暑き祭も更けて床
に入りけり

人はみな情にあつし轉々ど渡りし家々くりお
もひつゝ

かうむりしなさは多し今年もはや秋風吹く
にいつかむくい得む

朝雨にうす陽ながらふひそけさをさめつゝ友
のなさけおもほゆ (十月作)

親なし兒

親にわかれしまゝ四つになりし悲し子ぞ我が
怒れる下べにもだすは

弟のごといつくしまんごぞ思ふかもつぶらま
なこに我を見る子を (大正四年二月作)

朝
床

今朝もかも諸所の汽笛にやうやくさむれすべ
なき事を夢に見てゐし

朝めざめ口の苦睡家根にはきふたゝびは臥す
布團かい抱き

床をたゝむ心のとぼし便りたねてすぎし幾日
を指折り見つつ

ひし抱きいねんとおもひまちまけしその夜も
むなしいまにさびしき

今は心もかれしと思ひこもごものぞみもた
ゆく朝床に居り

かけもちし常の思ひの今朝は消えてひそひそ
くだる宿の梯子を

遺瀬なき夜々のおもひや裸寝の床のしとりを
じつとさすり居り

今日は明日はと待ちのたよりのいくそ日をう
つゝなくへしなほもつゞくか(九月作)

わかれ

下駄をはきつつ居れりとは知れど人目しげし
顔さへ見ずに離るゝ切なさ

今こそはせひなき別れ夕暗く錠の手元は定ま
りかぬる

鞆たもとふきつつ火元をば見て吾が居れど消くわし足
音に思ひはつきぬ

おししのび涙のみこみひたぶるに鞆ふきつゝ
堪へがてぬかも

立ち居つゝ時のすぐるはいや早し心はさらに
爲事になじまぬ

思ひあぐみ出て來りけりむきむきに人はいそ
げる街の中なる

人に語りてなごむうれひにあらぬかもうなじ
に暑き陽はかたむける(九月作)

雨ぐもり

たよりなき一本道で雨にあひ大學生に逢ひに
けるかも(大正四年二月作)

ひとり

とことばに此の家の父は父にあらず心さびしく年ほぎに来し

門松の細きが二本立てりけり今年は父が手にて飾りけむ

亡き母はまさに世になし土間に立ちよそ人じみし年始を言ふも

身の程のつつしみ深きこの頃をこの父は知らじものを得いはぬ

今はかも母は世になし父のへに坐れる女を呼ぶにたへめや

齡五十をすぎしと思ふ白粉に面を包めど地肌
のくろき

しわ深き此の人の手に白粉匂ふ吾れにくれん
と餅を焼く手に

常日頃したひし家と思はれず言もわいはぬ父
とかなしさ

紙ばりの母の位牌は佛壇の隅によせてあり一
年見ざりし

床づきて久しかりける床のあと疊の面にまさ
に残れる

施療院に行く心とはなりし親方の下駄の埃を
吾はうちはらふ

小路こうちの内いと静かなり親方と肩ならべ行く春
の陽あつし

春の陽のかゞよふ街を肩ならべ貧しきわれら
病院にゆく

芽をひらく街樹の明るさ親方は歩きおくれ
はるかに來れる

そりたての鬚あとしるし歩き來る親方の面の
いややつれたり

親方の立居あやぶみ満員の電車いく臺やりす
ごしける

土ぼこりかすかなるかも電車道すれすれに舞
ふ黄色き胡蝶（六月作）

雲

吾宿の煨ヒキのけもなき二階思ひ戻りていゆく街
はみぞれつつ

一包の炭を求めて宵ぐちの忙しき街を宿へ行
くなり五首母の一週忌

吾宿の棟木から下げて灯すランプ今宵なみな
みと石油さしにけり

赤々と火をとり上げて坐りけり来るべき友の
いまだに見えず

言葉あらげて吾が立ちたれば落ちくぼむ眼ほ
そめて母居たまひし

あが手にてぬぐへど母が落ちくぼむまなこに
 泪またわき出でし

ほどほど、雪ふりつもるこの夜早く妻と寝て
 居む心ゆたかに 廣野牛麿結婚す

新妻が手に洗ひけむ牛麿の胸に今日見るま白
 きシャツは (三月作)

冬の街

宿のものまだ醒めぬらし仕事始めに心すなほ
 に吾は出て行かな

門笹に音たて、渡る朝の霜風仕事始めに吾は
 いそぐなる

宿の主人に譯をあかしてうつり着の質の入替
たのむなりけり

質を出せし裕手に置き獨居つゝ逝きにし母に
思ひの多き

しげしげと醫師に此の顔見すゑられつゝわが
貧しさを明しけるかも

價あたい安く薬もらひて外に出たり裸にならぶ街の
木立は

薬さげて冬さり街をまだ馴れぬ親方先にまた
もどりゆく

師にも友にも逢はで久しやいつまでも心をま
げてすごさるゝべき (二月作)

一 月

逢はむとぞいらつ心はさびしかも足ふみにじ
りためらひてゐる

たれに忍ぶ我にもあらず今宵の廊くろなをゆくさき
もちてひとり歩くも

小夜更けとふけて梅雨けの暗き曇りとぼとぼ
としてさめつゝ戻る

母をもたぬかたみになれて肩つきあはせ酒場
を出づれば雨しぶきをり

酔ひぎれの友とほそくふる雨に心から肩く
み合はせあるく(二月作)

郊 外

母その母と争へど郊外に陽はふればこそいま
は忘れめ

玉きはる愁抱けば枯草にのこんの雪はまんぢ
りとして (大正四年三月作)

薬 賣

みづからの髻を剃らめど灯をともし剃らねば
うれぬ髻そり薬 (大正四年六月作)

大正七年

冬の日

雨の日の得意まはりのたよりなき吾を見てゆ
く同業者あり

△

新らしく得意を得たる身もかるく銀座の夕べ
をいそいで歸る

軒やれを流るゝ冬の日の光り細き命をまもる
はかなさ

今日も休みて母を守れどおぼつかな今宵食す
米如何して買はむ

ひと抱への本賣りに來し師走路は並樹も枯れ
て明るくありける

米のこころわづらひつきて目の色も衰へにける
母につげつる

病む母のひとり家居はつらからむ雪のもよひ
の心もとなや

篠懸すさかの残葉とぼしくちし葉のをりをり落つる
街のさびしさ

冬がるる篠懸の木の立ちさびし汗は流れて母
にゆくなり

入りくぼむ吾家に日ざし乏しくて母は静かに
奥にねむれる

冬ふかき曇りの中のおごろなる心をこらへて
轆轤をふむも

瓦斯の灯のほてりしたしき此の夜頃母の目の
色衰へにける (八月作)

静けき夜

雨多き深山と聞けば思はるゝ夏雨は身にこた
ふるものを

大寺の裏の静かに五つ六つ柘榴の花は落ちて
ゐるなる (大正七年七月作)

春の街

朝縁を素足にてふむこゝろよき此の春は來つ
思ひ足らはず

庭の土うるほひにけりめぐり來し春待ちかね
て母は逝きしも

使を持ちてたまさか歩く春の街満員の電車埃
まきてゆく

ひさびさに街を歩いてひとり心に悔い多き春
さなりにけるかも

ゆくゆくを思ひ定めむことのしげき歩き疲れ
て獨心に

廣き街の夜はしづかになりまさり酔ひて吾が
ふむ足音のさびしさ

悪酒に酔ひ更かしては戻り來つこの夜もひそ
かに宿の戸たたく

久々に晝間戻れば吾宿に母の寫眞はちりにま
みれをり

見ゆる程の春のほこりは街を行く人の足ごこ
に静かにまひ立つ

額の汗ぬぐひて居れば此の小路ちみちに砂塵まひ立
ち春めき來たれる

南ふくたゆき目醒めに小雨ふり向つ家の屋根
はだらにぬるる

南風雨もつ空となりにけり病もつ身は心くる
しも

降りしぶく春の小雨に街並の篠懸の木肌しつ
とりぬるゝ

向き並ぶ長家が小路こうぢの友が家に幾夜を寝けむ
此の夜も戻り來つ

疲れては戻りて來つるふかき夜の水溜ほのに
小路こうぢに光れる

友が家のざこ寝の眠りいやふかし獨りひそか
に吾床をのぶる

友の家に心沈めて寝て居れど戸の破れ多く北
風さむけき(五月作)

母は死にたまふ

今は言かよはぬか母よこの月の給料は得て來
て吾は持てるを

獨子のひとりの母よ薦いに寝て今はかそかなる
息もあらぬか

痛しども言はぬ母故今はさびし骨あらはなる
むくろ拭ひつゝ

見送りの人影さむくかたまりて明時あかときしらす鶏わらわ
は鳴き居り

霜凍てし街の面は明るめり母の柩はゆらぎつ
つゆく

獨子の吾はさびしも身を近く柩にそひて歩き
て行かむ

あかどきの街に足音のせはしきはいとひそや
かに母を送るなり

一すちに焼場へ通ふ細道の夜は明けにけり田
道となりて

わんまきそ母に何ものもあたらえたるや
母に只我れはすつりたまひし

上野路を今宵も急ぐ此の御りや
ふと思ひて夜をせふ家も

手車に母の柩は乗りにけり朝日かすかに流れ
てきたる

まはだかに母の柩はあらはれて朝風さむく吹
きすぎにけり

隠坊に押され押されて奥ふかく石の竈に母は
入りにけり

母を入れてひつたりとざす鐵の扉の音をさびしく出で、來にけり

母のなき初夜の寒さしみじみと火をうちかこみさびしみにけり

寂しくて夜毎わが名を呼びにける母も今宵は焼けて居りなむ

とろとろと今宵焼けなむ母はかなしなをたのみに此の後を行かむ

鐵の扉をあけてさびしもふたかけの骨まろび居りつめたくなりて (二月作)

悔い

岩つゝち花の明るき五月空またかるがるとも
のを言ひける (天正七年六月作)

秋の夜

やま蜂が巢をくふほどの家なれば晝の静けさをやうやく思ふ

冷えびえと秋の夜をどほしひとり居る母を思ひて行きがたきかも

疲れ來し父つくづくと酒を飲むそれにふれつつ母はかなしも (大正四年十月作)

大正六年

秋たつ頃

仕事におそく此の夜も行き得ず病む母は父と
そがひにさびしく寝て居む

ぬかるみを掃かて幾日か雨に經しつく息白き
今朝とは成れる

雨を持つ夕風さむくくもり空あかく明るくや
けてありけり

たそがれの街のごよみにおのづからうなじは
垂れて歩いて居れる (十一月作)

夕 空

暮れがてぬ夕空さびしきはみ行く母の心のは
かり知られぬ (大正七年八月作)

場 末

雑草のまばらに青き場末の原横切りゆけば朝
の寒しも

親方の仕事のはたにうづくまり蚊遣いぶして
吾が居りにける

桃の湯に浮ぶ桃の葉をちぎりつゝ今宵の疲れ
を忘れて居るも

又しても道具をいたためこの度はひとりもだし
て見て居れるなり

残り居てひとり道具をかたづける窓邊あかる
く夕やけにけり（十月作）

ま
ひ
る

主家を逃げ出でひもじき腹を抱きつゝつけて
行くべき家もなしに

此の街も晝時すぎてむ額近くかゞやく街土の
いきれ立つかも

炎天の街にしなえし繁り葉の桐の廣葉の下蔭
とぼし

今日の身のひもじさこらへ忘れず圖書館に
居て汗ぬぐふかも

貧し家に歸り來りて眞裸のざこ寝の中に身を
ひそめ寝る

圖書館のかんかんと晝の明るさに人々は皆腹
たらひて居けむ

食堂の午後の静けさ定價表ひそかに見つゝす
ぎにたりけり

傾きてなほ照る陽あし空しさに街をさまよふ
身につらきかも

築山のしげみの裏に身をひそめぼろぼろのバ
ン食べにけるかも

貧し家のざこ寝の中にはらからのなさけ嬉し
く落付きにけり

眠ねを足らぬ獨心にしつとりとさ霧に濡るゝ夾
竹桃の花

夜仕事

此の職にたけて歸る日いつならん夕べさびし
く汗の冷えつる

夜爲事のしまひ早めて錢湯に行く道すすし夏
の夜の月

夜仕事を終へて出て來し新開の月夜の街に鳴
く蛙かも

細々と雨になりける朝の目醒め母に歸らで幾
日堪へ得む

親方のまはすろくろの錐の音雨空近き露路に
なれるかも（九月作）

夕 暮

夕暮をおのづから煙る砂埃身にあびながら橋
を下るも

夕さりて廣場の驛に灯は點り堤の汽車は街に
入りにけり

煙に暗き夕べせんなく赤土のやはらぐ廣場よ
こざりゆくも

父を待つ宵のもだしの深まりて戸を吹き鳴ら
す風いでにけり

疾風の夕べ西空澄み透り太ふとと煙突は黒く
聳ゆる

久々の小雨に街の篠懸は木肌青みてぬれにけ
るかも

篠懸の枝はかられて春近き小雨の中に雫なが
るる

篠懸の幹の片かは乾きをり小雨のしぶく街は
さびしも

願ふは金のこと春の晝さがり油にしみし友に
逢ひゐて

洗場はまだ明け切れず朝の水しみじみと身に
冷えてくるかも

築地川をモウタアボウトの馳るらし此の初夏
の夕暮さむし

うなじ垂れ行けば四辻の赤躑躅あかづつじまひるの埃か
むりて咲ける

夕やくる築地の川の輕子橋を印半纏着て渡り
ゆく

身にそはぬ印半纏苦にしつゝ青葉垣根のもと
を吾がゆく

着古るしの下着集めて夕映の京橋のほとりと
ほとほとゆく

夕風に街樹の若葉ゆらぐかげあつめたる古着
かゝへて歸る

腰骨の痛みやすむるいとまもなし井戸の深く
に晝の陽光る (大正六年五月作)

朝

厨べにすてし茶がらは凍りつき雀は降りて餌
を探すかも

働きに父は行きにけり露路の霜消えてほのぼ
のゆげ立ちのぼる

晝近くなりてもいまだたづきなく足袋は埃に
まみれたりけり

曇り深き街の往來ゆききの影さむく雪のきざしの夜
は更けにけり

背戸の空地の疾風の音におしだまり母と二人
居りさ夜ふけにつゝ

軒の灯の光りひそかに雨氣だち夜更けて渡る
風冷えにけり

初夏の日の中の街の明るさにこれの身一つ行
きがたきかも(六月作)

あ　る　夜

宵の灯の流れ明るき街中を疲れしぼみて歸る
なりけり(大正四年四月作)

冬の街

午さがりうす陽ながるゝ冬の街蛇屋の前に人
たかり居り

おだやかに朝日ながるゝ川岸の倉庫のかけに
荷馬やすめり

濠の邊を吾はいそげり目に光る濠の氷はとく
るにあらむ

目に近く光るは濠の薄氷かれ芝ふみていそぎ
行くなり

冬の日の傾きかゝる街なかにつくづく歩き疲
れたりけり 職を求めに出て二首

ほとほと、疲れて歩く身に沁みて足の霜朽こ
そばゆきかも

いつさんに空地よぎりておぼつかな母を離る
身のこの呼吸あへぐ 貧しさに家出を思ひて三首

河岸に豚は居ならび入日さしその鳴くこゑは
殊に寂しも

灯ともす街飯煮ゆる匂ひうまければ涙ながれ
て母に歸るも (三月作)

父

老の身を堪へつゝ歩く父憶ひなほ晝床に落ち
つきがたし

疲れて歸る父故に晝床示すにしのびす息苦し
みつ夕歩きする (大正四年十一月作)

凍雪

夜ふかく仕事に冷えて火にかざす母上がもろ
手の輝のかなしさ

くだちゆく夜しみじみと母上が赤ぎれに塗る
薬は匂ふ

街かげの空地に残るはだら雪凍れるまゝに日
は暮れにけり

明けらしき月の光りに凍りたる空地の雪はふ
む人もなし (二月作)

兄の結婚を祝す

みおもひの足る日來にけり母上に告げまゐら
せん思ひこそわけ

山茶花

夕やけのつめたく明き街中にはのかに白き山
茶花のはな

街かげの濠うづむると高々と赤土つみて汽車
来りけり

潰す濠の水は泡だち濁りだち深き曇りを片よ
せにけり

朝の街に爪先寒むみ吾が立てば白き鶏一羽近
より遊ぶ

曇り明るき初冬の街に白き花さむく匂へり山
茶花のはな（二月作）

一耶を鑛山へ送る

喉ぶとの汽笛高鳴る本所を忘れたまふな雲が
くるとも

鑛山やまにゆき喉痛めなば母上も心し泣かむ叫び
たまふな

山道に堪へられなくて糞しらば尻濡らすらむ
草の朝露(大正六年六月作)

大正五年

秋
晴

宵街の灯のなかにうたじ垂れ心ばかりは焦ち
てけるも

街の灯の乏しきところ人目にも今は觸れねば
しみくと冷ゆ

公園の芝草原に風たゝす夕陽黄ろく流れてあ
りけり

秋晴るゝ芝生の中を足袋ぬぎて女ばかりも遊
び居るかな

夕街の裏の空地の静けさに雀きたりて久しく
遊べり(十二月作)

夕 飯

夕飯の後にながるゝ汗ぬぐひ健すこけき日の近づ
くうれしも

おそ秋のふかき曇りの濛の邊にこの濛つぶす
人は動ける

濠底にやうやく残る水の香の古きに魚はむれ
て潜めり(十一月作)

夏 の こ る

貧しくも石燈籠に灯をともし親子三人の夕な
るかも

たまゆらは石燈籠にことよせて親子の心明る
かりける(天正四年七月作)

病 中 吟

裏街の朝のたけゆく軒かげに羅宇屋はひとり
火をおこしをり

椎の葉かげ静かに風は流れきて洗濯の音いま
は久しも

日毎ひねもす家居はすれど椎の葉に日はかゞ
やけど蟬も來鳴かす

雨上りその夜も更けて米を磨ぐ母に涼しき風
吹きにけり

神田川朝潮みちて男らが大き角木をひきあぐ
るかも(九月作)

雑 詠

夜仕事をひとり休みて出でにけり夕べの街は
いまだ明るし

工場の夕食ののちのさびしきに辨當箱の錆お
としつつ

晝休みになればおのづと火を圍めどいまだ親
しまぬ吾等なりけり

火消壺に移す炭火の匂ひ滲み工場の夜はふけ
にけるかも

糖雨にけふる夕べのぬかるみを勵む心の出だ
しかねつつ

朝床に吾体の疲れいたはりて安くもあらぬ片
時なりけり

眞夜中を動く雨雲ほのかに見え小黒き街を風
はながるゝ

暮れはてぬ庭に静かに雨けむり母は貧しさを
おほふなりけり

大川の宵の満潮闇ふかく波ふくよかにほの光
りくも（八月作）

飴 賣

老いの身を飴賣りとしてほんのくぼにお多福
の面をまづはくくりぬ

飴を賣るおやぢの頭が多福面まことに朝を笑
つてゐるも

夜 の 雨

久々の小雨に街は更けにけり懈きからだを濡
れつゝ歸る

小雨降り街の夜更けて鐵をうつ響は遠くなが
れて来る

暗き夜の小雨に濡るゝ椎の葉のかそけき音を
聞きにけるかも

夜おそく冷たき辨當はみ居つゝかよわき母を
思ふに堪へず

機械場の機械も止みて夜は深し明り取りより月
ながれたり

犬の子をみんな掌に入れて軒あひの細き日だ
まりへぬくもりにゆく(四月作)

長家から(其一)

強欲な家主の庭ぞ吾が國の櫻の花のこゝちり
どころ

一面のむね割長家に朝陽降り老工女の兒は泣
きを沈めり(大正四年四月作)

朝
飯

しらしらとかそかに東いろめきて今し朝飯に
ぬくみけるかも

山茶花の垣べをゆきて朝早く辨當のぬくみほ
の感じつゝ。

朝々を落付かず見て過ぎにけり紅き山茶花の
散りつきんとす

冬の陽は工場の窓にあたゝかしなま懶くる心みぢ
んあらずなく(二月作)

長やから(其二)

老工女は稼ぎにゆきぬやがて見の茶碗を鳴ら
す音ぞゆる(大正四年四月作)

日だまり

宿なしの犬の親子と日だまりに親しみがたく
しましさをびしむ

馴染かね親子の犬は去りてゆく心のこしつゝ
この日だまりを

去りてゆく親子の犬は日だまりの吾をかへり
見つゝ終にかへり來す

陽だまりに椎葉のゆるゝしばらくはそれを眺
めて静かなるかな

陽だまりに去りかねてゐる久しくて吾家しみ
じみ冷たく見ゆる

晝の床に眼をどちて落付けぎなほ鎚の音の忘
れかねつゝ(二月作)

長やから(其三)

米磨ぎつゝ垣根を覗く女あり菖蒲のめばえを
母と語らふ

働きにゆく人はゆきにはたづみ音もなう輝る
たまゆらあはれ

大正四年

嵐のあと

女学校の庭に咲きたる赤き花かいま見て来て
ひとりかなしも

みつたりと嵐静まり月高し夜仕事終へてほく
ほくと歸る

嵐のあど月の明るく一本の煙突のけむりふか
く流るゝ

風邪心地に疲れて歸る夜をふかみ冷たき息を
吸ひにけるかも

晝さがり窓の下邊に落ちつかぬ居眠りをする
疲れたりけり

夕さりていまは苦しき手をつくね錠をはなれ
得る吾れならなくに (十二月作)

米吉の書簡

拜啓定めしお歸りの時間も遅れ申したることならんこ
案じ申して候。私ごとき爲に色々ご御心配下さることく
れぐれも嬉しう存じ候。さて本日金の入用有り云々兄
(米吉の實兄の事)に申し出たる處、どう有つても本月一
ばいは働いてくれよ、そのかはり小遣として五圓遣るさ
の言葉、理由をあかしされたる爲に、しひてさは到底言ひ

がたく困り居る次第。時に又かくの如き事申し出られたるぎにてはこれなく候へ共、來一日迄に旅費五圓程御心配願へまじくて候や。働きさへすれば二人にてかならずお返し申すべく、此段お心配切に願はしうて候。時に女事も行く迄働く心組にてありしかど、主人が彼女にさやかに親切つくしくれる爲、お神さんとの不和が有りて居がたしさて歸宅いたしたき由申し來り、誠に當わく(不明)候。「大正八年五月……高田浪吉宛」

夜

水ひきし濡めれる庭に鳴く蟲をきゝつゝさびし人も訪ひ來ず

蛇の居る硝子の檻を恐ろしみ何か欲して近づきてゆくか

店頭のがらすの檻の夜の蛇頭ならべて動くもせず

貫ひ湯につゝましくして浸り居り冷たき風は
そよりと過ぎぬ (十月作)

舞 子

秋もはや深くなりたる酒場の夜土間ふみならし舞子は舞ふも

いとけなき舞子入り来て唱ふ聲とぎれては寒き今宵の酒場

あさましき吾と思へば人なかに酔ひて唱ひて涙こぼるる

かり妻と並び枕はごもしもよ相抱かるゝ命をもちて (大正七年十一月作)

朝顔

競馬場の眞陽まつびるま赤土路たつた一道心
は躍る

青々と芝原ひろし仰げごも仰げごも雲雀の鳴
方は知れず

・〇

櫻葉の蔭をそよりと風わたり堪へられなくて
此所にまろびぬ

一本の水わが胸にはじけ散り瀧口の龍の目玉
の光り

米代を握る夕邊のこの誇りやうやく淋しくな
らんとするも

ほのぼのと背戸の空地にこの朝も朝顔さきまで
静かなるかな（九月作）

米吉の書簡

「まこと久しく筆もたざりし故おもしろし穂先は走る
思はぬ方に」ほんとうに苦しいく永い夜がやつと明
けてうれしい。私薬、今日きりでなくなる。どうでもむりを
おかして明朝はさいせい會へ行きたいと思ふ。書付もら
つてもらへまいか。原庭警察でもくれるさうだが、朝の七
時までだこの事、お願ついでに無理をお願する。昨日よ、君

が俺に自殺しろさしんげんにせまる夢を見た。死れぬ
くさ又言つた。どうかおゆるし下さい。（大正八年十一

月三日……高田浪吉宛）

青
芝

病む友と語りてこの夜更けにけつ外の面の風の遠くゆく音

しみじみと堪へざる疲れ病む友につひに訴へつさびしきものを

まじまじと灯あかるし働いて食はねばならぬ二人なるかも

初夏の空に高々と飛行船を仰ぎけりしかすがに工長は見ざりけるかも

板を抱へ大工が屋根に立てりけり初夏の光りのかゞやけるかな

街の中に陸軍用地青々と芝一面に静けきものを

芝の上に吾れ飛び下りつぞつくりと朝露の中に吾れとび下りつ

ふか／＼と青芝の露ふみて立てり工場は今日
休みなりけり（七月作）

貧窮餘録

工場には仕事とぼしくおぼつかなほかに我が
仕事ありと云はなかに

半月に得たる金のこのとぼしさや語るすべなき
母と吾れかな

投げ出せし金をつくぐと母見居り一間なる
家に夕日は赤く

極まりて借りたれば金のたふとけれあまりに
寂しき涙なるかも

日除にと粉袋かけて見たりけりあはれこの貧
しさにあくまでふさはし

みつしりと働らくべく職を求めしにはからず
も吾れに病ひありけり (四月作)

米吉の書簡

筆が持てなくなつてこまります。おそくなりましたが御
病氣なさうです。ね。たいへんこまります。もう病氣
程いやなものは御さいません。ほやくすこやかになつて
下さい。いつも御親切なおたより、うれしうございま
す。このごろではどなたからもだんぐたよりがなくな
つてしまひました。さびしうございます。友達の顔にも逢

はれば、誰でもいゝからしみぐ顔見合せて語りたいな
あまつくぐ思ひます病院の方、今迄色々皆様にも心配
かけたけれど、もうのぞみなささうです。御心配かけてす
みません一日もはやくおなほり下さい。(大正八年十一月
十日……中村美穂宛)

大正三年

乏しき仕事

工場に仕事とぼしも吾が打つ小錠の音は響き
わたりぬ

隔日に錠うちに来つゝ工場の中に坐して仕
事はとぼし

しんかんととぼしき仕事抱へつゝ窓に飛びか
ふ淡雪を見る

月夜路をしんしんとして歩くなり頭がちなる
親のなき子と

草花の種をわが蒔くめんめんと日は降りそゝ
ぎ静かなるかも

やはらかき土のしめりに草花の種したしめり
春の日は照り

疲れたる父は酒汲みしみぐと秘めおきし不
平言ひ盡きぬ夜ぞ (三月作)

林登美子氏へ

息あぐみ街には出づれ吾が目にししたしく見
ゆるものとてもなし

店頭の玻璃戸にうつる吾が姿うつゝぬかして
歩いて居れる

知る程の人ぞ戀しき街の中行方もなさにつか
れたりけり

九官鳥のなく聲さびし晝日中こがれて歩く吾
の心に（大正八年五月作）

眞 鍮 粉

宵暗き街の邊にうづくまりほろほろと麵^は麩^んを
食みにけるかも

うづくまり麵麩を食み居り夕闇の川いつばい
に秋風吹くも

疲れたる兩手をつくね冷え冷えと秋の星夜を
吾が歸るなり

鑢うすする吾が手の下に眞鍮粉は光りきらめき散
りたまりけり

胡坐して鑢する吾に朝日さし吾れ尊くて働く
今は

眞鍮の粉の沁み光る吾が指を日にかざし見つ
ひどりかなしく(十一月作)

深

案

しみとくと母の深案に餘りける虫さへ鳴かぬ
宵冷えにけり

歸りゆく街ぞつぶりと母上にいまだ遙けくて
暮れはてにけり(大正四年作)

槌の柄

わが握る槌の柄減りて光りけり職工をやめん
といくたび思ひし

ながき夜業を笑ひ語りの一つも嬉しからねば
涙にじむも

ニツケルのにぶき光りに長き夜を臉おもりて
手骨いたみきぬ

ふと詠みし歌をおづおづ記す間ぞ前の男の仕
事早かりし

屋根の陽にとつぶり臥しつひる休み顔の油の
焼くるをおぼゆ

仕事しつゝ今日もいろいろ考へたりされど日
記に書くこともなし

蒼き顔いづれも病みてあるごとし眠り足らぬ
朝ことさら思ふ (十月作)

機械の音

仕事場にかはゆき小僧一人居りそを使ふまじ
と思ひけるかな

つくづくと小僧の顔視つにつこりと笑ひてや
ればその夜うれしき

朝ごとを床の中に居て日をかぞふかなしきこと
この癖となりしぞ

指落して泣いて行きし友のうしろかげ機械の
音もただならぬかな

指落せし手に機械の音も
あつた
この音も
あつた

悄然と繻帯の手を胸におき友は病院より歸り
來にけり (四月作)

一年

吾れの身の吾がものならぬはかな日の一年と
はなりぬ日暮待ちし日の

目もすがら金錠をうつそこ痛む頭を巻きて金
錠を打つ

去年までこの工場に居し男日くるる窓外を笑
ひて通れり

指落しゝ男またあり吾れ一人煙草休みに日を
浴びて居り

泥道を四人三人過ぎければ足跡踏みて子等の
のしれり(三月作)

歌會の歌

向き向きに行きの忙しき師走街別れをすと
過ぎて來にけり 大正六年十二月十五日齋藤茂吉氏送別會

母の靈いづべの家を守るべき軒べぐにをが
ら火匂ふ 伊藤左千夫先生六週忌歌會

我が母の靈を迎へむ新盆の間はれて寂し家の
あらねば 伊藤左千夫先生六週忌歌會

真間の山みち梨賣る菅野の少女かこみ皮むか
せつゝ我らはむなる 大正七年九月二日市川歌會

都大路の石塀にたれて残りたる日向葵を見れ
ば實を結びたる 子規歌會

腰すゑて酒を待つ間の今宵は殊に腰掛樽の尻
に冷え来る 大正八年一月根津娛樂園アラギ歌會二首

嫁をむかふと此の身にかゝる言はたえて今宵
も酒に腹しみわたる

裏軒のかげに久しき残り雪土をかむりて雨に
とけ居り 長塚節氏忌清水谷皆香園歌會席上一首

一間のうち梅雨けに冷えし眞夜のなか目をお
しつぶれど忘らえぬ汝は 六月十五日照太郎宅行路アラギ會

青桐のこゝだ垂實はうるほはずまゝしき心吾
は悔ゆるるる 大正八年八月相坂宅行路例會席上一首

〔追 補〕

病 む 母

轆轤ふむ手元ははやも暮れかゝりうち焦ちつ
つ 獨りさびしも

○ 親方の聲にあらねば驚けり母のかたへに今朝
はさめける

ひさしうつ時雨に目醒めうらさびし嫁の話も
きえてひさしや

さく起きて板間に飯を焚き居れば足のうらよ
りしみじみひゆる

母にかはりさく起き出でて炊ぎするくみ置き
の水はつめたかりけり

風邪のいたみこらへて來つれ陽だまりに此邊
の子供かたまりて居り

しみじみと秋はゆくらし静かなる母のねむり
を今宵まもるも

○月はいま入り方ならしいたつける母を抱きて
かはやに我が居り 大正六年十二月作

砂 塵

職を持たぬこの身さびしくきさらぎの裸木な
らぶ街を來にけり

まき立ち來る砂塵の中に職の無き身を悲し
みて佇みにけり

金を得て母に行く行く早稻田通りこらへられ
ずて又書估に入る

椎の木の繁葉の下の曇り深く疲れたれども歩
むなりけり

屋敷街の深き青葉のまがなしさ洗濯仕上げて
置きに來にけり

なみくくと夕潮みちて居りにけり車ひき來し
呼吸の切なさ

身の疲れとけぬ夜頃のさびしさを雨にふられ
て告げに來しかも

堪へ得ずと行かば嘆かん母上を心を持ちて釣
瓶をにぎる

軒下の深き堀井の黒まりて夕さり來る風のさ
びしさ

仕事なきこの家に替へてもだ久しひそかにぬ
る、冷汗をぬぐふ 大正八年作

赤

すべなさや壺にみつ血のこぼるるになほも血
潮ののどにせきくる 大正八年九月作子規忌歌會詠草